

2020年度 SciREX オープンフォーラム 第10回

「コロナ時代の科学技術外交の展望」

2020年度 SciREX オープンフォーラム最終回となる第10回では、松本洋一郎 外務大臣科学技術顧問をお招きし、パンデミックの中でどのように科学技術外交を進めていくべきか、ディスカッサントとして科学技術顧問を設置する際に主導的な立場を担った白石隆 SciREX センター顧問を交え議論を行いました。

冒頭ではモデレータの角南篤 SciREX センター長より、米国がバイデン政権へ移ったことが契機となり、科学技術外交が変化しつつある背景を説明しました。具体的には、気候変動をはじめ様々な科学技術分野への支出が増大し再び科学技術外交の中心へと戻ってきた現在、日本はどのように外交を進めていくかが非常に重要な論点であると、オープンフォーラムで取り上げる意義を訴えました。

登壇した松本顧問はまず、安全保障と経済成長の両面に加え、STI for SDGs に代表される地球規模の課題を解決していく上で科学技術外交の重要性はさらに増していると強調しました。その上で科学技術外交の基本となる「外交における科学」、「科学のための外交」、「外交のための科学」という3本柱に沿う形でこれまでの日本の活動が行われてきたこと。TICAD や G7、G20 といった重要な国際会議に加え、外交官の科学技術リテラシー向上のための省内セミナーの開催、外務省科学技術顧問のネットワーク FMSTAN への参加、2018年のINGSA 国際大会の東京開催など、日本の科学技術外交が着実に進展してきたと述べました。

2020年4月というパンデミック最中に科学技術顧問に就任し、海外へ行けない中でどのように活動を進めていくかが目下の課題だといいます。その状況下でも科学技術外交推進会議のメンバー刷新や在外公館アタッシュにも公開した科学技術外交ウェビナーの開催、各種国際会合へのオンライン参加といった活動を進めていると説明しました。

一方で、パンデミックを受け日本の科学技術力やその基盤をどう高めていくか、外交上でも基礎となる部分だけに担当省庁とも連携を取りながら施策を進めていく必要性を訴えました。

ディスカッションでは白石顧問より、東日本大震災時に総合科学技術会議の常勤議員として、官邸へ科学的助言を提供するシステムがなかったことに危機感を持ち外務省科学顧問制度創設へ動いたこと、当時英国の科学アドバイザーが自国民へ「東京から退避する必要が無い」と発表したことでGRIPSの留学生の動揺が収まったこと、といったこれまでの経験を紹介。その上で、パンデミックに対して各国と比較した場合に日本の感染状況がそれほど悪く無いのは、政府がうまくやっているのではなく社会がきちんと対応しているとの見解から、政府への助言システムはより強化すべきだと指摘。また、近年の経済安全保障の問題が科学技術外交でも大きな論点となるだろうとの見解を示しました。

松本顧問からは米中の狭間に置かれた状況で、日本の研究者も経済安全保障を含め社会を見渡して研究を進めていかなければならない、と応じ幕を閉じました。